



お問い合わせ先
大里農林振興センター 農業支援部
 熊谷市久保島1373-1
 TEL. 048-526-2210 FAX. 048-526-2494

大規模水稲経営向けの雑草対策

1 熊谷市内の発生雑草種



昨年熊谷市内では、イヌビエの発生が多く見られました。イヌビエは近縁なタイヌビエより乾田状態に適應したヒエです。他にもアゼガヤやクサネムなど、落水条件下で出芽する雑草が増加傾向でした。これらの雑草は除草剤処理後に落水してしまつた場合や、代かきムラで高くなつた箇所等に多発します。近年、水稲経営は大規模化しており、以前ほどほ場を細かく見回れないことも原因の一つと考えられます。

2 大規模経営の雑草対策方針

大規模経営だから少しの雑草は仕方ないと放置すると、年々増えて手に負えなくなり、農繁期に除草に割く時間がないことが雑草対策で後手に回つてしまう最大の原因です。そこで、
 ①「農閑期の雑草対策」 ②「省力化と剤選択」 ③「雑草は小さいうちに叩く」の3点の対策について紹介します。

① 農閑期の雑草対策

時間に余裕のある農閑期に、ほ場の埋土種子量（土中にある雑草種子の量）を減らすことで、次作の雑草発生量を減らすことができます。具体的には、収穫後耕起前に「プリグロックスL」を散布すると、ヒエ等の一年生雑草は発芽後まもなく枯死します。クログワイ等の多年生雑草に対しては、水稲収穫時に高刈りし、再生した所に「ラウンドアップ」を散布すると塊茎を枯らせます。

また、石灰窒素を10a当たり50kg程度施用すると雑草種子の休眠が解けて一斉に発芽してくるため、そこを耕起する方法

もあります。石灰窒素を施用した場合、基肥を減らす、もしくは省略できます。

② 除草剤施用の省力化と剤選択

水管理の徹底が難しい大規模経営では、移植30日後頃までに少なくとも2回は除草剤を散布するのが望ましく、慣行では中後期剤を散布しますが、移植後一か月間程度は忙しいことが多く、散布が遅れがちです。そこで、「田植え同時+中後期剤」ではなく、「代かき同時+田植え同時」の2回処理体系の導入も検討する価値があります。例えば、滴下装置を用いれば代かき同時で「アルカト乳剤」を施用できます。このときの田植え同時処理剤としては、残効の長いカフェンストロールという有効成分を含む「キクトモ」や「月光」といった剤が向くと考えられます。

③ 雑草は小さいうちに叩く

大規模経営では、雑草がほ場の外から見えないほどになつてから「トドメ」や「クリンチャー」等の中後期剤に頼る例が多くみられます。もちろん、これらの剤は最後の切り札として重要ですが、雑草が大きくなってからだと、すでに光や

養分の競争を受けており、水稲は減収し、雑草は種子をつけて翌年の埋土種子量が増えています。良い雑草対策とは言えません。減収や埋土種子量増加を防ぐために、雑草は小さいうちに防除しましょう。

「スマート農業技術活用促進法」認定について

昨年10月、スマート農業技術を活用して生産性向上に取り組みとする農業者等の計画認定制度が始まりました。農業者等が、スマート農業技術の活用及び農産物の新生産方式導入に関わる計画を作成し、地方農政局長の認定を受けると、長期低利の融資や設備投資時の税制優遇等が受けられます。

詳細は、農林水産省HP（二次元コード）を御覧いただくか、大里農林振興センター（048-526-2210）までお問い合わせください。



（大里農林振興センター）

農業支援部

